



若宮八幡大神社

今回のかやぶんかわら版では、8月14日(土)の夜に行われた、長坂町長坂下条の若宮八幡大神社夏祭りにて奉納された「若宮神社の稚児の舞」についてお伝えします。(内海)

わかみやじんじゃ 若宮神社の ちご 稚児の舞

「若宮神社の稚児の舞」は、古くから若宮八幡大神社に伝わり、その起源は、江戸時代の宝永年間(1704~1710)とも、文政年間(1818~1829)とも言われています。氏子中の10歳になる娘が、採り物が違う、①「御幣と鈴の舞」②「剣と鈴の舞」③「弓の舞」の3つの舞を、神楽殿にて奉納します。現在は少子化の影響で、氏子中の娘だけでは舞手が足りなくなってしまったため(舞手の不足は、多くの伝統芸能保存団体に共通する問題です)、長坂下条に住んでいる氏子中の娘だけでなく、他の地域に住んでいる孫達も奉納に加わっています。伝統的に、舞手は“10歳の女子”ということでしたが、今年の祭りでは、8歳から14歳の5名の女子が舞を奉納しました。

「稚児の舞」の奉納は、午後7時に始まりました。緑色の千早と緋袴、そして天冠を身に付け、きれいに化粧を施した舞手が登場しました。この日を目標に、祭りの約1週間前から、毎晩練習をしました。「鈴で悪い神様を追い払い、住民の心を落ち着かせ、穏やかになってもらいたい」という祈りが込められている①「御幣と鈴の舞」に始まり、「四方の悪い神様をさらに追い払い、剣で神様の命を絶ち、村に入らせないようにする」という②「剣と鈴の舞」、そして最後に、「弓を使って、悪い神様をさらに断絶する」という祈りが込められている③「弓の舞」の順に奉納がされます。5名の舞手は、全ての舞を舞うことができます。

8時には、神社本殿で式典が執り行われ、終了後、「稚児の舞」は再開されます。境内にある土俵では奉納相撲も行われます。10時に祭りが終了するまで、①~③の舞を繰り返し舞います。

祭りの準備をはじめ、「稚児の舞」の指導や「稚児の舞」の楽(篠笛・大太鼓・小太鼓)の演奏は、若宮八幡大神社の敬神会によって行われます。当日はあいにくの雨でしたが、長坂下条の多くの方が訪れ、舞を奉納する稚児達に声援を送っていました。

舞手が少ないというのは、「若宮神社の稚児の舞」の存続において、大きな課題ではありますが、舞手の女子達にとっては、1年のこの時期にしか会えない友達に会い、きれいな衣装を身に付け舞を奉納するというのが、夏休みの大きな楽しみのように、それぞれが積極的に取り組んでいる様子は、とても頼もしかったです。また、舞手のお母さん方の中には、娘時代に舞を奉納したという方もいて、娘が同じ舞を舞うのはとても嬉しい、と口を揃えていらっしかったです。

長坂下条に脈々と伝わる「若宮神社の稚児の舞」が、今後も、何世代にもわたって続いていくことを祈っています。



① 御幣と鈴の舞



② 剣と鈴の舞



③ 弓の舞



舞手と楽